

学位論文の要旨

専攻 社会文化学専攻

氏名 畠中香織 印

1 論文題目

在日外国人ケア労働者における異文化適応

2 論文の要旨

近年、Economic Partnership Agreement (EPA) に基づき、外国人ケア労働者が日本の看護・介護分野へ導入されている。少子高齢化で看護・介護分野の人手不足が深刻となる中、外国人労働者がケアを担うことが現実的となっている。在日外国人ケア労働者には適応問題が予測されるが、外国人や施設の関心は日本語習得（上野, 2012）や、国家試験対策（奥田, 2011）へ向けられる。しかし、外国人労働者はコミュニケーションに困難を抱え（Alam & Wulansari, 2010）、外国人を受け入れた施設では、日本人との人間関係調整の必要性などを感じている（小川・平野・川口・大野, 2010）。

文化の差や価値観の異質さは、現場トラブルの可能性を潜在させる。例えばコミュニケーションが不十分であれば、伝達ミスから患者や高齢者の生命の危険を招いたり、意思疎通の滞りがストレスをもたらしたりする。こうした職場トラブルは、異文化性に起因する問題（田中, 1998）と捉えることができ、外国人との間に存在する文化差への気づき、文化理解の促進、職業や対人スキルを習得することにより予防や緩和が可能な問題として考えられる。異文化適応過程の解明は問題解決への対策の端緒となろう。また、問題解決によって彼らの職業人としての成長が促され、満足な職務遂行や職業生活につながると考えられる。しかし、それには外国人の適応努力だけでなく、日本人の理解と協力も不可欠となる。外国人の不適応に注目するのではなく、周囲の日本人との関係を含めたポジティブな概念についての適応研究を進め、外国人ケア労働者と日本人の協働環境について研究を展望し発展させていきたい。

職業人に関する異文化適応研究では、看護・介護分野での就労者を対象とした研究は乏しい。異文化適応への影響要因の検討は多くみられるが、適応過程に関する実証的解明はあまり進んでいない。そこで本研究では、日本の看護・介護現場で働く外国人ケア労働者の異文化適応過程について解き明かし、適応への影響要因を検討していく。そして、外国人と日本人が理解、協力しあえる協働環境と、その環境がもたらす異文化間ケアの創造的可能性についても論じていく。

本研究は、在日外国人ケア労働者の質的調査（研究1, 2, 3）と、外国人ケア労働者と日本人スタッフを対象とした量的調査（研究4, 5, 6, 7）から構成され、研究4, 5, 6は外国人、研究7は外国人と職場の日本人スタッフの双方が分析対象である。

まず研究1では、EPA制度前に来日した外国人看護師と介護士の適応課題と対処について、面接調査によって聞き取り、ソーシャル・サポートに注目しながら事例分析を行った。そこから、外国人ケア労働者の適応過程を概念化した、初期型三層モデルを提案した。研究2では、EPA制度で来日した外国人4名を対象とした半構造化面接を行い、彼らの適応過程について初期型三層モデルを用いて縦断的に事例を分析した。その結果、彼らの適応が心理的適応、社会文化的適応、自己実現的適応から構成される三層モデルで説明でき、これらが進行していく過程が読み取れた。また、心理的適応の下位構造が確認され、モデル修正の必要性が示された。

研究3では、上記で明らかとなった心理的適応の下位構造を取り入れ修正した、中期型三層モデル（畠中・田中, 2012）を分析に用いた。EPA制度で来日した外国人9名と、制度発足前から日本のケア現場で就労する外国人2名を対象に、想起法による半構造化面接を実施し、適応過程を検討した。そして、彼らの異文化適応の課題、進行過程、影響要因を含む適応の様相を読み解いた。彼らの適応には、心理的適応、社会文化的適応、自己実現的適応の3側面が求められ、その層間には順序構造が明らかとなった。さらに、文化学習が適応の促進・抑制要因となることが示され、職場環境や対人関係における文化的要素の理解が重要であることが示された。

研究4では、研究1, 2, 3で明らかとなった適応過程と影響要因を検証するために質問紙調査を実施し、異文化適応過程の実証的解明と、その影響要因について検討した。適応の下位構造は以下の通りであった。心理的適応は「活力」「精神的安定」の2因子、社会文化的適応は「親身ケア」「親和関係」「職場順応」「職務遂行」の4因子、自己実現的適応は「有意義感」の1因子で構成された。これらから、因子間の複雑な影響関連が明らかとなり、適応層の関連性が示唆された。

研究5と6では、外国人のソーシャル・スキルと、彼らが母国人と日本人から期待するソーシャル・サポートの適応への影響を検討した。スキルは「直接的解決」「相手への心遣い」「積極的関わり」「行動意図推察」、サポートは「日本人仕事」「日本人生活」「母国人生活・仕事」「母国人学習」のそれぞれ4因子に分類された。間接性の理解と他者への配慮といったスキルの実践は、外国人の精神的負担にはなるものの、社会文化的適応を促す重要な要素であることが示された。母国人からの学習サポートは外国人の適応初期に求められ、日本人からの日本語や文化・慣習サポートは、彼らの職業人としての成長に不可欠であり、自己実現をも促す効果が認められた。研究7では、日本人スタッフと外国人ケアを対象に、社会文化的適応、ケア技術、ソーシャル・スキル、ソーシャル・サポートに関する自己と他者評価を比較して、双方に存在する認識の差を明らかとした。外国人のケア技術は日本人スタッフの求めるレベルに達しておらず、また外国人の社会的スキルも不十分とみられており、相互理解の必要性が示唆された。

最終章では、これら一連の研究をもとに仮説適応モデルを修正し、新たな三層モデルを提案している。外国人ケア労働者の異文化適応は3側面で説明でき、その中でも社会文化的適応の親和関係が、職業人としての成長に不可欠であることが示唆された。すなわち、外国人ケア労働者の適応は、日本人との関わりの中で進行し、それが外国人の文化学習やスキル習得に効果的であり、外国人の知識や経験を活かした質の高いケア「異文化間ケア」の創出へと繋がるであろう。多文化化が進むケア現場において、外国人ケア労働者と日本人スタッフが互いの理解を深め、信頼関係が構築された協働環境が求められる。